



By alex hanoko

# 2015 愛媛大学スポーツシンポジウム

～大学発！スポーツを通しての地域活性化～

2015年 11月28日(土) 13:00～15:30

場 所 愛媛大学 城北キャンパス  
南加記念ホール(松山市文京町3)

- 対 象
- ・スポーツを「する」「みる」「支える」ことに興味がある人
  - ・スポーツを介した地域活性化に興味がある人
  - ・大学の学生団体顧問教員

## 「大学発！スポーツを通しての地域活性化」

2017年にえひめ国体・えひめ大会が開催され、さらには2020年に東京オリンピック・パラリンピックをひかえ、次代を創る若者を育成する機関としての大学は、今までの枠組みに捉われない地域活性化へ繋がる教育モデルの創出が必要とされています。本シンポジウムにおいては、多方面からの大学への期待を明らかにし、今後の大学におけるスポーツを通じた地域活性化教育の構築へとつなげていきます。

# プログラム

日時 11月28日(土) 13:00~15:30

場所 愛媛大学 城北キャンパス

南加記念ホール(松山市文京町3)

参加費 入場無料

13:00 開会

<全体司会>

秋丸 國廣(愛媛大学 社会連携推進機構 准教授)

13:00~13:30 【紹介】「大学の正課外活動と地域活性化」

平尾 智隆(愛媛大学 教育・学生支援機構 准教授)

13:30~13:50 実践報告

発表① 「正課外活動の国際化」

~2015 ユニバーシアード光州大会の視察を通して~

中尾 走(愛媛大学大学院 教育学研究科 院生)

発表② 「正課外活動の社会化・国際化」

~伊方町ソーシャルツアー及びサッカー台湾U-14 代表チームサポートを通して~

山中 亮(愛媛大学 教育・学生支援機構 特任助教)

13:50~14:20 【講演】「アスリート視点からの、地域の活性化に対する大学への期待」

<講師>

武田 大作 氏(オリンピック DCM ダイキ所属 愛媛大学大学院農学研究科修了)

14:20~14:30 休憩

14:30~15:30 パネルディスカッション

「スポーツを通しての地域貢献と大学の正課外活動への期待」

<司会>

平尾 智隆(愛媛大学 教育・学生支援機構 准教授)

<パネリスト>(敬称略)

武田 大作 (ロンドンオリンピック出場 オリンピアン)

鶴村 幸弘 (愛媛県 企画振興部地域振興局文化・スポーツ振興課 課長)

山中 亮 (愛媛大学 教育・学生支援機構 特任助教)

中尾 走 (愛媛大学大学院 教育学研究科 院生)

15:30 閉会

※

この講演録は、当日の発表・講演・パネルディスカッションのうち、下記の発表・講演を収録したものです。

- 【紹介】「大学の正課外活動と地域活性化」(平尾智隆)
- 発表① 「正課外活動の国際化」~2015 ユニバーシアード光州大会の視察を通して~(中尾走)
- 発表② 「正課外活動の社会化・国際化」~伊方町ソーシャルツアー及びサッカー台湾U-14 代表チームサポートを通して~(山中亮)
- 【講演】「アスリート視点からの、地域の活性化に対する大学への期待」(武田大作)

問合せ 愛媛大学 教育・学生支援機構

学生支援センター

担当 平尾

Tel 089-927-8116

hirao@ehime-u.ac.jp

## 大学の正課外活動と地域活性化

平尾智隆

大学とはそもそも何かという、整理だけ最初にさせていただければと思います。大学の中で、スポーツを中心とする正課外活動がどう位置づけられて、それが地域とどういうふうに関係していくのかということを考えていく上で、やはり大学というものの存在は、今一度振り返っておきます。

法律を見ていくと、こういうふうにかかれてあります。高い教養とか専門的な能力を養うところ、あるいは自主性、自立性、教育、研究がキーワードとして並んでいます。教育基本法だけでなく、学校教育法という法律の中で、大学は何のためにあるのかということもしっかりと規定されております。学術の中心となるということですね。専門の学芸を教授、研究する、道徳的及び応用的能力を展開する、あるいは教育研究を行なって、その成果を広く社会に提供する、社会の発展に寄与する、そういう組織であらねばならないということを法律によって規定されている存在ということになります。そういう意味で、ありきたりの整理かもしれませんが、教育、研究、社会貢献というのが大学に課せられた、法的にも課せられた使命であるといえます。

これを達成するために、大学はいろんなことをやっているわけですが、特に教育という部分は、学生を成長させるという意味で重要なファクターということになります。ただし、ここでいう教育は、基本的には正課教育と呼ばれるものになります。スポーツを中心とした正課外活動は、その中にあるような・ないような位置づけにあるというのが現実かと思います。当然ながら、正課が先あって、それをしっかりと修めないと学生は卒業できない訳ですので、それが第一義的に最優先されることになります。でも、それ以外、学生の成長をしっかりとしたも

のにする正課外活動の位置づけは意外に不明瞭なところにあります。また、学生自身が正課外活動を通して自分たちの存在意義を確立することを大学の使命に照らし合わせた時、それはどこに位置付くのかということも少し整理した上で議論を進めて行動を起こしていきたいなというふうに思っています。

愛媛大学の中での正課外活動の位置づけということですが、愛媛大学憲章というものが、そこでもろんなことが書かれております。独法化にともなって国立大学法人になり、地域にあって輝く大学を目指すということで再出発することになりました。また、愛媛大学は、学生に卒業時に身につけていることが期待される能力、愛大学生コンピテンシーというものを設定しています。そのコンピテンシーを育成する場として、三つの場所を明確化しております。愛大学生コンピテンシーは5つの能力、12の具体的な力で構成されており、それを目指して我々はやっていく、学生自身は自分がこれから生きていく人生のキャリアの中で、どの能力を学生時代に高めていくべきということをしかりと考えた上で授業なり正課外活動なりに取り組んでいくということでがんばっております。

この中で正課外活動の位置づけというのはどうなっているのか、正直なところまだまだ弱いのが現実です。愛媛大学の中で特徴的なのは、準正課教育という区分を作ったということがひとつ特徴的ではありますが、一番分かりやすい二分法としては、正課教育と正課外教育、授業とサークルみたいな関係なのですけれども、愛媛大学は一つ新しい領域をつくった。これは一つの功績なんですけれども、しかし新しい功績の裏で正課外活動は、まだまだ十分に練られることがないというのが現状です。

スポーツを中心とした正課外活動が愛媛大学の中でどういうふうにあるのかということですが、学生の自発的な活動によって成立しているもの、そして、それを大学が公認という形で認めているものが正課外活動として展開しています。かなり幅広い内容を持っています。広い反面、きっちりカバーできてない、定義できていないのが正直なところです。そういう意味で、正課外活動の位置づけを明確にする、且つ、大学として正課外活動をどの方向性でもって行くのかということについて議論していかないといけない、そういう時期にきているというふうに思います。

この時に出てくるキーワードが社会化と国際化ということになります。学生自身が、あるいはスポーツを中心とした正課外の団体・部・サークルが自分たちの得意な能力を持って地域社会に出ていくということは、既に行なわれていることではあります、それを大学としてしっかりと後押しして、組織化して、展開してもらおう。あんまりカッチリやりすぎると、正課教育の一部になって正課外の良さを失うということになります、正課外の良さを失わず地域に出ている道筋ってものを、大学はしっかりと、あるいは地域の皆さんとしっかりと手を組んで、送り出して行く、そういうことがひとつの方向性かなというふうに思っています。

もうひとつは国際化ということで、大学のグローバル化とか、社会のグローバル化というのが大きく叫ばれる昨今ですけれども、学生の正課外活動についてのグローバル化というのは特に忘れ去られたままに置かれている領域かなというふうに思っています。学生個人がトップアスリートで強くなるために国際化して国際試合にバンバン出ていくみたいな話はチラホラと聞きますが、愛媛大学ではそんなにありませんけれども、日本全国の大学を見たらそういうすごいトップレベルの学生が大学生になるということはあると思います。しかし、大学の正課外活動、スポーツを中心とした正課外活動を

国際化していくということの行動を大学がしているとはほとんど聞きませんので、正課だけではない、正課外の国際化というのは、ひとつの今後の大きな方向になっていくのかなというふうに感じています。実際、その実践事例をこの後、中尾さんと山中さんにお話いただくことになりますけれども、それを材料に後半の議論も進めていければなというふうに思っています。

部活、サークルとは大学でやっぱり行なわれることであると。スポーツを中心とした正課外活動、大学にある資源、これをどうやって社会に還元していくか、社会の発展に寄与する活動にしていくかっていうことを、我々自身これから先考えていきたいなというふうに思っています。それを個人のレベルで体現化していただいたのは武田大作さんです。武田さんのような偉大な卒業生、学生を大学としてどういうふうの後押しするかということについてキッチリやってきたということではありますので、そこをこれからどう整備していくか、整備する上で、当然ながら大学の使命に関わらせて、社会の発展にどう寄与できるか、その発展に寄与する時に必要になってくるのはフィールド、受け入れていただく地域の方です、そのアレンジをしていただく何らかの存在ということになるのかなというふうに思っています。

愛媛大学で現在活動しているスポーツを中心とした正課外活動、これはリソースですよ。学生の力は決して低いものではありませんので、そのリソースを学生の自由にして楽しくやるっていうのは正課外活動の醍醐味ですけれども、それだけにとどまらず社会の発展に寄与していただける活動に繋げていけるんじゃないかと、学生自身も楽しく正課外活動ができて、大学としてもそれを後押しすることで学生の成長、地域社会の発展に貢献できる、地域社会はそれで発展していく…そんなモデルができればいいなというふうに考えています。

今後の正課外活動支援の方向性として社会化と国際化を提言しましたが、社会化は愛媛大

学ですので愛媛県に立地する大学として、愛媛県という地域に対して社会化していくのが当然の理です。もう一つは国際化ということで、これは愛媛に留まることは国際化という文字面からして無理なんですけれども、そのグローバル化を進めていくということで地域社会との還元も模索できるかなと思っています。

社会学でいうところの社会化とか、そういうことをスライドの中で定義しておきました。我々大学教員は、学生に日々いろんなことを教えていますけれども、それは我々のほうがその分野に関してはできるから教えられることができます。そうじゃない高い能力を学生はまだまだ持っていますので、その能力をどう地域社会に活性化するか、それをちょっと考えていきたいなというふうに思っています。

国際化はより高いレベルの正課外活動を行なうために、強くなるには国際化していくのが当然ということ、つい先日、武田さんのお話のなかで聞いて、ああそうだなというふうに思ったんですけども、より質の高い正課外活動、自分たちの活動をしていくために同じことをしている世界の大学生といろんなことを学びあう、そんな方向性でひとつやっていかないと

いけないかなとふうに考えています。

これは、山中さんの作った図ですけれども、それで得られたエッセンスを最終的には正課教育のほうにまた持っていくことができたらというふうに考えています。これは実際、これからやっていくことなので、まだ道筋がある訳ではないんですけども、大学としてこういうことを考えた上で、皆さんと議論を重ねてスポーツというものの新しい価値、新しい方向性を見出していきたいと思っています。「大学」と「正課外活動」と「地域の活性化」ということをキーワードにしながら議論を進めて、愛媛県のスポーツというものを将来に渡って、国体があってオリンピックがありますけれども、それだけではないその先まで続く新しい価値観と、遺産といいますか、そういったものを残していける、それを議論できる場にしたいなというふうに思っております。

今日は、この後いくらかの実践報告聞いていただいて、武田さんのご講演も聞いていただいた上で、皆さんといろんな議論ができるなと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

## 大学の正課外活動と地域活性化

平尾智隆\* 山中亮\*  
\*愛媛大学教育・学生支援機構

2015愛媛大学スポーツシンポジウム



---

---

---

---

---

---

---

---

## シンポジウムの目的

- 愛媛大学の（スポーツを中心とした）正課外活動の社会化・国際化についての議論を深める。
- 大学の正課外活動が地域の活性化に貢献できるかどうか、その方策についての議論を深める。
- スポーツを介した地域貢献についての議論を深める。



---

---

---

---

---

---

---

---

## 簡単な自己紹介

- 愛媛大学 教育・学生支援機構 学生支援センター 准教授
- キャリア教育、正課外教育の支援
- チアリーディング部ほかの顧問



---

---

---

---

---

---

---

---

## 大学とは？

### 教育基本法 第7条

- 大学は学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。
- 大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。



## 大学とは？

### 学校教育法 第83条

- 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする
- 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする



## 大学の存在意義

- 学術の中心として、高い教養と専門的能力を培う⇒「教育」
- 教育研究を行い、その成果を広く社会に提供する⇒「研究」
- 成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する⇒「社会貢献」
- 正課外活動が存在意義を発揮しやすい分野は？



## 正課外活動の位置づけ

### 愛媛大学憲章

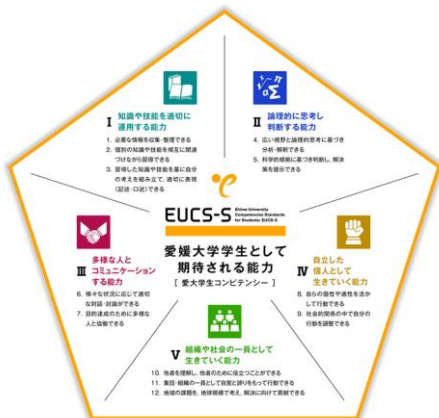
○平成16年4月1日、愛媛大学は国立大学法人愛媛大学となり、国の一機関の立場を離れ独立した経営体として再出発することになった。この大変革期にあたり、「地域にあって輝く大学」を目指す愛媛大学は、その理念と目標を以下に定め、「愛媛大学憲章」を制定する。



## 正課外活動の位置づけ

### 愛大学生コンピテンシー

- 「学生が卒業時に身に付けていることが期待される能力」と定義。
- コンピテンシーを育成する場として、正課教育・準正課教育・正課外活動の3つの場を明確化し、全ての教員・職員が関与することを明示。





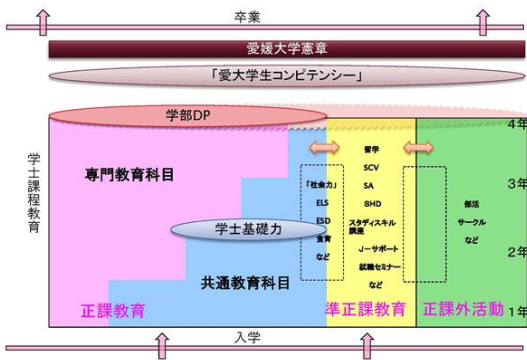
## 正課外活動の位置づけ

### 準正課教育

- 「卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動」

### 正課外活動

- 学生の純粋に自発的な活動によって成立し、それを大学が公認しているものが正課外活動



## 部活・サークル活動とは

### 部活・サークル活動

- 大学（社会の発展に寄与する目的）で行われる。
- 正課外活動（学生の純粋に自発的に行われる活動）。

- 学生の自発的な活動であるけれども、活動が大学の目的（社会の発展に寄与）につながっていることが望ましい



## 今後の方向性

- 愛媛大学で現在活動している部活・サークルにおいて、「社会の発展に寄与する」につながる活動とは

今後の正課外活動支援の方向性

- 「地域」社会化
- 国際化

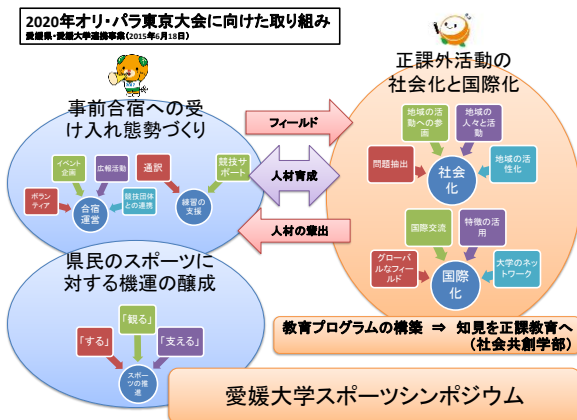


## 社会化と国際化

- 社会化：社会の文化、価値観、規範を身につけていくこと。先天的ではなく後天的に獲得される。
- 「地域」社会化：その地域社会の生活様式を知り、自らの能力・活動を用い、その地域社会の活性化に寄与すること。
- 国際化：よりレベルの高い正課外活動を行うため、同じ活動をしている世界中の大学生との交流を促進する。



2020年オリ・パラ東京大会に向けた取り組み  
愛媛県・愛媛大学選抜専攻(2019年6月18日)



## 正課外活動の国際化 ～2015 ユニバーシアード光州大会の視察を通して～

中尾走

愛媛大学大学院教育学研究科、中尾走です。私は、6月30日から7月7日までユニバーシアード光州大会に行ってきました。その視察を通して感じたことなどを、このようなタイトルで発表させていただきます。よろしくお願ひします。

まず、ユニバーシアードとはユニバーシティとオリンピックの組み合わせで、国際大学スポーツ連盟、FISUによって開催されるスポーツイベントです。心と体における卓越というFISUのモットーのもと開催され、教育と文化の発展、スポーツまたはスポーツマンシップを通じた友情の構築といった成長をとげるために世界中の国から大学生が参加します。ユニバーシアードの参加資格は、ユニバーシアードが開催される年の前年に卒業した人を含む17歳から28歳までの大学生又は大学院生です。

今回、夏季にユニバーシアードが開催されたのは韓国の光州という都市で、こちら赤丸で囲ってあるところになります。今回、私は光州ユニバーシアードに視察に行かせていただいたんですが、視察の目的といたしまして、この大会中、競技をする人、観戦する人、応援する人、ボランティアとして参加する人など、この大会に関わっているすべての人にとってどのように感じられるものであったのか、また、同年代の競技者や観戦する人、ボランティアとして大会に関わる人などを見る中で、同じ大学生としてスポーツの国際大会に何ができるのかといったことに重点を置いて視察に行ってきました。

まず、光州についての紹介です。光州はマンションなどがたくさんある住宅街の間にこちらの写真のような散歩道がたくさんあり、そこをウォーキングしてる人などが多くいて街全

体として健康に関する意識が高いなと感じました。また、大会期間中はこちらの下の赤いテントの写真、赤いテントが写っている写真があると思うんですけど、このようなテントを出してイベントを行なっていました。僕らが見たのは、テントの中でオカリナを吹いている集団で非常に楽しそうでした。住宅街の中の散歩道でオカリナを吹いたりイベントをしたりなど、日本にはない自由な雰囲気がいいなと感じました。

また、光州ユニバーシアードの開会式の前日にはイブフェスティバルという前夜祭があり、いちばん左の写真のこのような屋台がたくさん出ており、そこでご飯が食べれたり、ユニバーシアードのグッズが買えたりしました。韓国で有名なアーティストによるコンサートも行なわれ、このイベント自体は夜の8時半開始だったのですが、前日の朝から800人近くの行列ができており多くの人で盛り上がっていました。

僕がこのイベントを通して一番驚いたことは、このイベントが大学のキャンパス内で行なわれているということです。学内でこのような大きなイベントが行なわれており、大学の持っている潜在能力に驚きました。

次の日の開会式では、会場の周辺で、こちらの左の緑の屋根のテントがあるんですけど、このテントの中で催し物がたくさん行なわれていました。韓国の伝統的な遊びができたり、韓国のご飯が食べれたり、伝統的な音楽のコンサートがあったりと開会式が始まる前から多くの人で盛り上がっていました。

こちらの右の写真はスタジアム前の記念写真を撮った時の写真です。開会式は4時間近く行なわれ、選手やボランティアの人たちはみんな

な同年代なので写真を取り合ったり、一緒に踊ったりと楽しそうな雰囲気でした。大学生の大会にスタジアム…何万人も入るスタジアムなんですけど、そこから溢れるぐらい多くの人が入って、年齢とか性別とかは関係なしにすべての人が感動しているのを見てスポーツの力に驚かされました。

これは、最後の開会式のフィナーレの時の写真になります。開会式の視察が終わり、次の日から様々な会場へ行っているような競技のスポーツの試合を見に行きました。その道の途中や会場の近くで道案内をする人や通訳をする人たちとたくさん出会いました。

この二つの写真は光州マダムというふうに書いてあるんですけど、光州の普通の女性たちで、大学生のボランティアの方も道案内だったり通訳をする人の中にいました。でも、大学生のボランティアの人よりもこの女性たちのほうが非常にエネルギッシュで、気温 30℃を超える暑い中、道案内とか全く言葉が通じないんですけど、ジェスチャーを使って表現したりして非日常的な体験を楽しんでいるように感じました、応援する人達は会場ごとにお揃いの T シャツを着ていて、応援歌を歌って応援するなど一体感がありました。

また、下の写真に写ってるんですけど、観戦にきた人は全員スティックバルーンというのを渡しており、また、試合会場に大学内の体育館だったり、サッカー場を使用していることもあり、大学の持っているものを最大限活用していると感じました。

大学生の世界大会なんですけど、選手ととても近い距離で観戦でき、気軽に声をかけることができました。なので、女子テニス日本代表として当初ユニバーシアードに参加していた選手にこの大会の良い点と改善してほしい点についてインタビューさせてもらいました。

光州ユニバーシアードの良い点は、Wi-Fi の環境と選手村の環境の 2 点を挙げられてました。Wi-Fi の環境は右上の写真のような、右上の写真に写っている機械が各会場に設置して

あって、パスワードを入れないと使えないようになっているんですけど、選手はそのパスワードが教えられており、選手全員 Wi-Fi が使えるようにはなっていました。観客の人はパスワードがわからないので使えませんでした。

次に、選手村の環境は、選手村があった同じ敷地内にジムやグラウンドが併設しており、また、食堂は 24 時間利用可能で料理の種類も非常に多くて満足しているというふうに仰っていました。

また、改善してほしい点としては、部屋に冷蔵庫がないのと選手村のゲートの数が少なく待ち時間が長いっていうのと、開会式等は次の日に試合があるので夜遅くまではしないしてほしいというふうに仰っていました。

同じように、指導者の方とも話をする機会があったので、テニス日本代表コーチのコーチにも同じようにインタビューをさせてもらいました。光州ユニバーシアードの良い点としては、トイレの数が多いのと会場に売店などがあり試合の間に選手が気軽に飲食ができるという 2 点を挙げられていました。

トイレは、施設にもともと併設されているトイレだけじゃなく、会場に簡易式トイレを作って数を増やしていました。また、選手は競技ごとにバスで会場まで移動するんですけど、選手によっては試合時間がバラバラなので、その選手それぞれが自分でご飯食べたいタイミングでチームのバスを使って選手村の食堂にご飯を食べに帰ることができないので、会場に売店などがあると非常に助かるというふうに仰っていました。

改善してほしい点としては、空港からのバスの長時間移動は選手に負担がかかるので飛行機にしてほしいと仰っていました。

僕たちが韓国についてからの一週間では、愛媛大学の連携校である光州大学の日本語専攻の学生に通訳としてガイドしてもらいました。彼はこの時に初めて通訳っていうのをしたんですけど、彼に最後の日に通訳を通して感じたことなどをインタビューさせてもらいました。

その時に言っていたのが、通訳をしてみて自分でも人のためにできることがあると実感できたというのと、自分は将来的に通訳などの職種で人のためになる仕事がしたいと感じるようになったと仰っていました。

ここからはぼくの予測でしかないんですが、大会のスタッフとして正式にボランティアで通訳をしている人たちも同じ気持ちになったのではないかと感じました。

光州ユニバーシアードの視察を通して感じたことは、大学生でも世界大会のボランティアや通訳として貢献できることはたくさんあると感じました。しかし、大学や県が大学生にできることとしてボランティアや通訳をしていきましょうと訴えても説得力に欠けると思い

ます。大学生として何ができるのかといった視点ではなく、大学生がこの経験を通して何が得られるのかといった視点で訴えていくべきかなというふうに感じました。それは、先程の彼のように通訳をすることで好きなことを仕事にしたいというふうに思う感情であったり、自分の能力が人のために役にたつなどといった気づきであったり様々だとは思いますが。このようなことを大学生が感じてくれることが地域に貢献できる人材の育成やグローバル人材の育成につながっていくのではないかと感じました。

以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

# 正課外活動の国際化

～2015 ユニバーシアード光州大会の視察を通して～

愛媛大学大学院 教育学研究科  
中尾 走

---

---

---

---

---

---

---

---

## ユニバーシアードとは



**【ユニバーシアードは「大学」と「Olympiade」の組み合わせ】**  
ユニバーシアードはFISU(国際大学スポーツ連盟)主催の国際スポーツイベント。「こころと体における卓越」というFISUのモットーのもと開催され、教育と文化の発展、スポーツまたはスポーツマンシップを通じた友情の構築といった成長を遂げるために世界中の国から大学生が参加する。

**【参加資格】**  
ユニバーシアードの参加資格はユニバーシアードが開催される年の前の年に卒業した年を含む、17歳から28歳の大学生または大学院生です。

---

---

---

---

---

---

---

---

## 光州(Gwangju)



---

---

---

---

---

---

---

---

## ユニバーシアード光州大会



### 【視察の目的】

・大会に関わる全ての人にとってどのように感じられるものであったか

(競技者、観戦者、ボランティア)

・大学生としてスポーツの国際大会に何ができるのか

---

---

---

---

---

---

---

---

## 光州に住む人たち



・マンションが沢山ある住宅街の間には散歩道があり、住民が散歩をしているなど、健康に対する意識が高い



・大会期間中はテントを出し、イベント等を行っていた

---

---

---

---

---

---

---

---

## 前夜祭(Eve Festival)



---

---

---

---

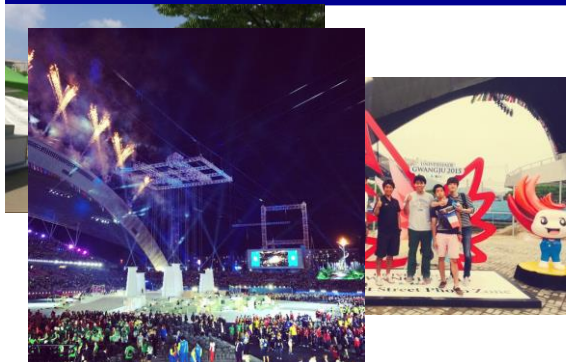
---

---

---

---

## 開会式(Opening Ceremony)



---

---

---

---

---

---

---

---

## ボランティアをしている人たち



道案内をする光州マダム



通訳をする光州マダム

気温が30℃を超える非常に暑い中でも、ボランティアをしている人たちが楽しそう。お互い言葉が全く通じず、会話が成り立たないが、ジェスチャーやお互いに知っている英語での会話を楽しんでいる様子だった。

---

---

---

---

---

---

---

---

## 応援をする人たち



会場ごとに応援する人たちがお揃いのTシャツを作るなどして、応援に一体感があった。



---

---

---

---

---

---

---

---



## 選手にインタビューしました



女子テニス日本代表の選手

### 「光州ユニバーシアードの良い点」

- wi-fi環境
- 選手村の環境(ジム、グラウンド、食堂の料理の種類等)



### 「光州ユニバーシアードの改善してほしい点」

- 部屋に冷蔵庫がない
- 選手村のゲートの数が少なく、待ち時間が長い
- 開会式等は次の日に試合があるので夜遅くまでしないで欲しい

## 指導者の方にもインタビューしました



テニス日本代表コーチ

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

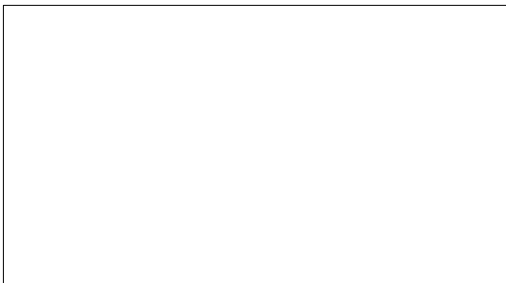
### 「光州ユニバーシアードの良い点」

- ・トイレの数が多(施設に併設されているトイレだけでなく、会場に簡易式トイレを作っていた)
- ・会場に売店などがあり、試合の間に飲食が気軽にできる

### 「光州ユニバーシアードの改善して欲しい点」

- ・空港からバスの長時間移動は選手に負担がかかるので飛行機にしてほしい(選手は空港から4時間かけてバスで移動)

### 通訳として光州大学の学生についてもらいました



### 初めての通訳体験記

- ・通訳をしてみて自分でも人のためにできることがあると実感できた
  - ・自分は将来的に通訳などの職種で人のためになる仕事がしたいと感じるようになった
- 大会のスタッフとして正式にボランティアで通訳をしている人たちも同じ気持ちになったのではないかと感じた



## 正課外活動の社会化・国際化

～伊方町ソーシャルツアー及びサッカー台湾 U-14 代表チームサポートを通して～

山中亮

はい、それでは失礼します。愛媛大学の山中です。先程、話があったように、学生が経験をしていくうえで気づきを得るために、どういう経験のデザインをしていくのがいいかということで、社会化と国際化という観点でデザインした、愛媛大学のサッカー部の事例を紹介したいと思います。

まず、先程も、平尾先生の話からありますが、サークル活動とは大学の活動であるということ。それと正課外活動であるということ。その2点から学生の自発的な活動であるけれども活動が大学の目的につながってることが望ましいという観点を重要にして指導しております。

①正課外であるので、あくまでも義務ではないということです。取り組むかどうかは自由であり、すなわち自発的というところがおもしろい。

②さらには活動時間の捻出が必要であること。学生ですから、4年間で130単位程度を取得するために4年間がありますけども、それを削ってでもサークル活動する時間を捻出することに対して、取り組む価値を明確にすることが、活動自体に厚みをもたせていくことが重要です。

③さらにこの取り組みの機会が、自分自身の強みの構築の機会になっていくということ。

その3点が、この正課外活動であるところの強み及び特徴だと思っております。

社会化に向けては、①強みを活かした活動を実社会にということ。②活動自体が地域への貢献となるということ。

国際化に向けては、①自分の強みを活かした活動が、国際的にも通用するのかどうかということが確認できる機会。②活動自体が先程も言

ったように、現地への貢献や大学や日本の良さを伝える機会の創出になってるかどうか。

最終的には、グローバル感覚をもつ地域への貢献ができる人材の形成になってるかどうかということを考えながらプログラムをデザインしていくということを行っております。

実社会に出るといろいろ厳しい状況が待ち受けていますので、学生の中に自分の既成概念を乗り越えていく経験から、将来において社会の中で困難を乗り越えていくための考え方の習得の機会にしたい。実際それが正課教育の中で行われることは理想的ではありますが、スポーツを通した正課外活動の中で、スポーツというツールを活用し、一生懸命ギリギリのところに取り組んでいく中で、負けた勝った現実を受け入れながら成長していく。その経験を通して、既成概念を乗り越え、問題を乗り越えていくことのできる「考え方」の習得につながっていくというようになっていくことを目的としております。実際、OECDにおいてもキーコンピテンシーとして伝えている内容として、多様な社会グループにおける人間形成の能力、自立的に行動する能力などがしまされております。

現代の若者たちを、悟り世代とか、ゆとり世代と言うことは簡単なんですけれど、それを作りだしてるのは私たちを含めた前の世代に生まれた大人として、実際に若者の成長に対して働きかけれることをしていかなければいけないというのが、大人としての責任じゃないかと思っております。

今回お伝えしたいのは、正外活動の社会化という側面から、伊方町のソーシャルツアーという活動についてご報告いたします。この写真にあるように素晴らしい自然のある伊方町の中で、四国の大学でNo.1になるという目標のもと活

動しました。具体的なねらいとしては、①自分からアクションを起こせるようになる。②集団になっても個人として考え方が持てること。③みんなの前で自分のアイデアを出せるようになることなどを考えて活動しました。

サッカー部としての活動ですので、サッカーのパフォーマンスを上げるということはもちろんなんですけども、活動自体が、地域に貢献しているということも重要な要素です。さらに既成概念を変える側面については、サッカーが上手くなるのはグラウンドで行うトレーニングだけではないんじゃないかということも意識しました。愛媛大学の学生は真面目ですから、グラウンドで手を抜くことはほとんどありません。

しかし、結果としてはなかなか勝っていくことができない。じゃあグラウンドだけにその解決のことを求めていく今までの既成概念を変えるチャンスなんじゃないかと位置付けました。結果的にそうならないかもわかりませんが、行うにあたってそう思えるかどうかというところが大切だと思います。

実際、みなさんも社会に出られて、感じられていることもあると思います。仕事をしていく中で頭打ちになってしまった時に、じゃあそこでどうするか、今がダメだからもうダメなんじゃないか、じゃなくて、そこで今まで自分が経験したことの中から、自分が得た知識の中から解決する糸口はないのか、自分1人でできないのだったら、人と繋がればいいんじゃないのか、そういうことを考えていける経験に繋がるきっかけになればということを考えています。体験のイメージとして、体力的に限界の中、自分の限界を乗り越えること、壁を乗り越える経験というのが大きなポイントになってきます。

活動内容はこの写真にありますようにゴミ拾いが中心でした。他にもいろいろ取り組みました。雨の中で何袋も持ちながらゴミを運びました。この写真が集めたゴミ袋の数なんですけども最終的にはゴミ袋がだいたい 700 袋でした。写真のようなボミだらけの状況をゴミがな

いような状況にしていくということに取り組みました。

さらに取り組みとして自炊生活もしました。全員で食事することによって、作ったり食べたりすることによって、食事の時にみんなが一生懸命作ってくれたものをしっかり食べていくというような経験につながりました。地域の方々との交流も行いました。

このような経験が成長に繋がってきてると思います。なかなか結果としては表れては来ては不是ですけども、自分たちのチームとしての当事者意識とか、自分たちのチームとして問題を本気で考えるという選手が少し増えてきているように思います。

国際化の事例として、この夏サッカーの台湾 14 歳代表が松山に来ました。FC 今治さんが開催したバリカップという大会に参加するための事前キャンプとして来松し、目的としては愛媛及び日本に慣れるための活動として位置付けました。写真にありますように人工芝のグラウンドで活動したり、坊ちゃんスタジアムで、KANO の舞台にもなった「球は霊なり」という石碑の前で写真を撮ったりと、様々な活動をサポートしました。

まず、通訳に関してですけども、愛媛大学の留学生が担当してくれました。自分たちの国の選手たちが来るということで、誇りを持って快く対応してくれてました。日本への受け入れ、日華交流協会の方々が昼ご飯をごちそうしてくれた時にしっかりと通訳として、選手たちのかけ橋になったり、買物で、店員さんとの会話の取り次いでくれたり、愛媛大学として繋がりをもちながらできたことが非常に良い点でした。

サッカー部としてはトレーニングのサポートをしました。人数の調整と一緒に活動したり、ゴールキーパーの活動をしたり、一緒に活動して、うまいかなかった時にちょっと罰ゲームをしたり全く問題なく行えました。

台湾のプレーヤー達は 14 歳なので、大学生と活動することによって、スキルの高い選手と

サッカーをする機会として効果的でした。さらに大学生にとっても、言葉が通じない中でどうコミュニケーションとるかという経験をする中で、大学生たちにもサッカー以外にも成長する機会があると思います。

さらに活動として、道後散策に行く交流があったり、話に出ましたが坊っちゃんスタジアムの見学に行ったり、地元のプロサッカーチームで愛媛FCと交流をしたり、さらには松山市への表敬訪問をさせていただいたり、愛媛大学への表敬訪問を行い、いろんな活動を実施しました。

そのような活動を通して、愛媛大学の学生が関わることによって、台湾から来たサッカーのチームである、海外のお客さんが、「松山に来てよかった、愛媛に来てよかった」と思ってもらえるということに自分たちの強みが

活かせて行ったと思います。このスライドは、通訳の学生さんたちの言葉なんですけども、「非常に良い思い出となり、愛媛に来てもらってよかった。」さらには、「自分たちも非常に、いい経験ができた。」というようなことを感じながら、活動できているということが書かれています。

初めにお伝えしましたが、正課外のプログラムを社会化・国際化に向けてデザインをしていくことで、正課外活動を活用して地域とうまく繋がりながら、さらには繋がったこと自体が地域活性化に結びつけていけるよう大学としても、正課外活動を始めとしてより一歩踏み込めるようにしていきたいと思いますので、今後ともよろしく願いしたと思います。以上で終わります。

## 正課外活動の 社会化と国際化

愛媛大学サッカー部の事例から  
「伊方町ソーシャルツアー」  
「サッカーU-14台湾代表チームサポート」

---

---

---

---

---

---

---

---

## 大学における正課外活動(サークル活動) の位置づけ

- ・サークル活動とは
  - 大学(社会の発展に寄与する目的)で行われる
  - 正課外活動(学生の純粋に自発的に行われる活動)



学生の自発的な活動であるけれども、活動  
が大学の目的(社会の発展に寄与)につな  
がっていることが望ましい

---

---

---

---

---

---

---

---

## 正課外活動(サークル活動)の位置づけ

- ・正課外である
  - 義務ではない
    - ・ 活動への取り組みは自由であり、自発的なものである
  - 活動時間の捻出が必要
    - ・ 学位取得のための4年間から、時間を捻出するため、価値を明確にすることが重要
  - 「強み」の構築の機会
    - ・ 大学の教育のみにとらわれない「強み」を構築していく経験ができる
      - キャリア構築の経験

---

---

---

---

---

---

---

---

## 正課外活動の「社会化」「国際化」

- ・「社会化」
  - 「強み」生かした活動を実社会へ働きかけ、その経験からの成長
  - 活動(ex.合宿など)自体が地域への貢献となる
- ・「国際化」
  - 「強み」を生かした国際交流活動(より高いレベル)を実施
  - 活動自体が、現地への貢献、大学や日本の良さを伝える機会の創出
  - グローバル感覚を持つ人格形成

---

---

---

---

---

---

---

---

## 正課外活動の「社会化」「国際化」

- ・自分の既成概念を乗り越えていく経験から、将来において社会の中で困難を乗り越えていくための、「考え方」の習得の機会
- 「キー・コンピテンシー」(2003,OECD)
  - ・社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
  - ・多様な社会グループにおける人間関係形成能力
  - ・自律的に行動する能力

---

---

---

---

---

---

---

---



伊方町ソーシャルツアー

## 正課外活動の「社会化」

---

---

---

---

---

---

---

---



## 愛媛大学サッカー部の想い

### 【目標】

・四国の大学でNO1になり、自分たちのサッカーを全国に発信する。

### 【目指すチームのイメージ】

- ・自分からアクションをおこせる
- ・集団になっても個人としての考えが持てる
- ・みんなの前で自分のアイデアを出せる。それで失敗しても批判されない、前向きな組織にする。

---

---

---

---

---

---

---

---

## 愛媛大学サッカー一部合宿

### 【体験のイメージ】

体力的にきつい作業により、壁を乗り越える経験を行う。全学年で一緒に作業、一緒に体験をする。一人一人が責任を持ち、最後まで全力で作業をする。

---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動内容

### ・ゴミ収集



---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動内容

### ・ 自炊



---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動内容

### ・ 交流



---

---

---

---

---

---

---

---



サッカー台湾U-14代表チーム松山キャンパスサポート

## 正課外活動の「国際化」

---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動内容

### ・ 通訳、アテンド



---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動内容

### ・ トレーニングサポート



---

---

---

---

---

---

---

---

## 活動内容

### ・ 交流



---

---

---

---

---

---

---

---



## アスリート視点からの、地域の活性化に対する大学への期待

武田大作

どうも初めまして。私は愛媛大学農学部卒業をしております武田でございます。私からはパワーポイント等というものは使っておりませんので、口だけですけどよろしく申し上げます。

今回は講演ということで日本代表らしい格好ということで、ロンドンオリンピックのジャケットを着てきました。丁度、ラグビーワールドカップがイギリスで行われておりますが、私も同じ国のロンドンに行って、日の丸を背負っておりました。本日は選手として日本を代表する立場として参りました。

先ほどまでの発表の中で正課外活動っていうのが出てきましたよね。正課外活動を通して大学に貢献出来ることでもあり、学生という立場で勉強以外の活動も行うことが一番望んでいるところです。私にとっては自分の後輩たちにはぜひオリンピック選手になってみたらどうかなっていうことが願いでもあります。こうした大学に貢献できることは人それぞれだと思いますが、私にとってはスポーツですからそこに尽きるわけです。

どのようにしたら強くなれるだろうと考えた時には人は必要です。あと物は絶対必要です。それとお金ですね。私にとっては三つの条件が満たされればと考えています。

そこで我々の愛媛大学に置き換えてみましょう。私たちの大学は地方国立大学ですから非常に潤沢予算があるわけではないです。お金に関しては私自身制約があるように思います。

それ以外の人と物に関しては大学には期待をしなきゃいけないところです。人とは学生を意味しますが、まず先に物のほうから説明しますと、地方だからいろんな物がそろわない感覚があるかと思いますが、大学っていうのは様々な学部がありその施設を使用する事が可能で

す。私自身通常ではできない測定が出来る道具はそろっています。その辺りをぜひ地元でそして地域に還元するということ。地方国立大学として非常に有意義だと思っています。

それ以外には今日使用している記念館など施設も可能かと思えます。過去の学生時代の大学の施設のなかで思い出されるのはジムですが、冬は寒いうえに暗く最悪でした。そのうえやる気が起きにくい練習場でした。ただ私にとってみれば、あるだけでも良かったという気持ちもありました。現在のジムという明るく暖かくなって、大学の設備もいい方向に変わっているということです。これらの施設については地域の方々にぜひ使ってもらいたいなと思っております。

あと私はボート選手ですので大学にはボートも購入していただいて本当に助かりました。1994年のアジア大会が最初の日本代表ですが、艇もなくオールもいいものがなく買っていたこと。いろいろなところの経験と言うかですね。物を買っていただいてですね。

最後に人ですが、私は農学部でしたが、非常に正課外活動に理解のある先生方に恵まれて、のびのびと正課外活動に取り組みさせて頂きました、当然正課活動は行いますが、それ以外にも正課外活動は学生の人としての幅を広げる意味で有効だと思います。大学に期待するところはやはり人材（学生）です。地方においてなかなか人が少ない中、出す（正課外活動）しかないかなと思っております。

そういう中で正課外活動、先程いろいろ山中先生とかもやられましたけど、やはり地域団体とかとあいうふうな社会活動をする。その辺りは一人の人間として場所を使う。掃除をする。これって当たり前のことですね。そういう一般的なモラル的なところもすごく大事だと思

ます。現在も私は学生を教えることもあり、一緒に遠征などに行きます。昔とは違うなど世代格差も感じてはいますが、学生に対して感じる事は悩んでいるところです。どうしようとか。人間は経験において成長するものかと思いますが、普通の正課活動以外に正課外活動っていろいろな人間性が育まれる機会です。

正課外活動の一環ではないですけど、過去に私自身が学生から感じたことがあります。今ちょうど写真が出てます。2012年ロンドンオリンピックの国内選考レースで問題があり、その後、レースに勝ってオリンピック出場となりましたが、コーチも監督もいない状態でした。その為、コーチは自分達で何とかしようという話はしましたが、外の目ってないと駄目だということでビデオカメラの撮影者を探しました。そこで、合宿地のイタリアで探すという選択をしましたが、あまりにも田舎のため通じるのはイタリア語だけだったため、撮る段取りから英語が喋れる人を探さなきゃいけないなど、練習以外の事で疲れてもと思いました。そこで我慢も考えましたが、やっぱり撮る人がいないと問題だということで、急遽、当時のボート部の後輩に頼みました。頼み方というと直接に携帯に「イタリア来れる？一週間くらい」っていうふうにメールを打ったら、「はい、行けます」って返信が入り良かったと思うのも束の間で、「どうやってパスポート取ればいいんでしょうか」って返信を見た時に、本当に海外行ったことないんだと思って非常に不安になりました。その後、彼がイタリアに来てくれて、私たちは助かりました。そこでビデオ撮影のみという経験以外にイタリアという文化、人などにふれあい、ふとしたきっかけで世界と少しでも近づけたことが彼（学生）にとっては大きな経験となり、自信につながったようです。

彼のようなパターンは珍しいですが、愛媛で国際的なつながりで通訳は有効じゃないかと思えます。やはり海外に行くと主要な場所では英語が通じるように感じます。ところが、私がボートで行くところって言うのは湖や川を

転々としていきます。そんなところは田舎であります。そうすると全く英語が通じないです。ですから英語と現地語を喋れる人が一人いてくれるだけで非常に助かります。

これを我々に置き換えて想定してください。海外の人が愛媛に来て、愛媛の山地（久万高原町）でトレーニングしていると想定して、うまくすぐ海外選手が通じるかというわけではやっぱりないです。ですから、そこに一人、スポーツを分かっている人で英語と日本語が出来る人がいれば最適です。そういう中で正課外活動の大学生にはチャンスがあるように思いません。私も英語には苦労していますが、海外選手も含めて愛媛には愛媛国体選手、オリンピック選手もくるかもしれませんが、選手の意図している事やスポーツの現場の事を伝える手段になるかと思えます。このコミュニケーションが仕事になってくると思えます。そんな場所で急遽、地元のおじちゃん、おばちゃんたちに例えば、「英語勉強してください」、これって結構きついことだと思いますよね。私の両親も田舎におりますが大変な労力がかかります。そこに人材を送り込むすなわち大学生を活用するってことが重要になってくると思えます。

オリンピックとか、国体、いろんな大会があります。メインは確かに選手達であります。ただ、それだけでは絶対に開催できません。そこに一番大事なのは周りを取り巻く人です。特にスタッフでありボランティアです。オリンピックも国体も開催できません。

ただし、比較として先程の発表のユニバーシアードとオリンピックでは大きく違いを感じました。単純に競技のレベルが違うことも影響していますが、私のオリンピックでの経験から感じます。具体的にはボランティアの量(人)、質および教育が違うと思えます。

先程の発表であった備品の項目である WI-FI、冷蔵庫がしっかり設備されており、そういう意味ではユニバーシアードはやはり大学の大会であるように感じます。オリンピックにおいて設備はもとより、ボランティアの数も多く

なおかつ教育が行き届いています。人間同士として選手と仲良く、選手のことを聞こうという意識があって、A4の紙を各選手村で配布しており、まず JAPAN といった国名を明記し、それぞれの国あわせた挨拶をしたりだとかし、その国に対応していることは選手にとってうれしいことです。

皆さん、ギリシャ語ってすぐに分からないと思いますが、「おはよう」ということを「カリメーラ」っていうとすぐに打ち解けていきます。

国内において特に地方色を感じるのは国民体育大会ですが、私は21回選手で出場しておりますので、それぞれの地域に行き、それぞれの特色を感じます。そこで我々愛媛県、愛媛大学にとって、その特色は必要であり、人は必要な訳です。その中で若い人（学生たち）を何とかして活かす。ここに我々（大学、学生）の価値があると思います。物にこだわらず、今、あるものをいかに有効に活用するか、そこに尽きると思います。

学生は、ゆとり世代とか、さとりとか世間では言われておりますが、私はそんなように思っておりません。私自身ボート部の学生達と話をしますが、練習なり部の運営などみんな頑張っって何とかしようとしします。たまたまいい部員達かもしれないですが、そうした中で、各人に責任やポジションを任せて、「君たちがやるんだよ。」と仕事を伝え、確実に行っていけば大学生とはいえ、出来るはずだと思います。またそれぞれを、まずこれをやる、続いてこれをやる、そしてこれをやるっていった感じにより具体化していくようにすれば、更に学生たちは動きやすいのではと思っております。そこを愛媛大学のみでなく、大学全体で非常に重要になってくるのではと思われまます。

また人間同士の付き合いですので、大学生に限らず「あいさつ」は大事だなと思っております。我々にはもう2年後には愛媛県国民体育大会やって来ます。その5年後には東京オリンピックがやってきます。そこで世代を超えて子供とか老人とかまったく関係なく、皆さん、ぜひ「あ

いさつ」をして欲しいと思います。学生主体に考えますが、いろんな国に行って正課外活動とか課外活動などいろいろあると思いますけど、ここでは人との触れ合う絶好の機会です。その機会の中で、いかに「あいさつ」で相手の心を掴むかというのがすごく大事だと思います。

私は海外行って、一番困るのは本当に先程言ったとおり、英語が通じないところです。今はスマートフォンがあるのでいろいろ翻訳ソフトがありますけど、過去は辞書を片手に英語に変換して、一生懸命自分の言葉で使いましたが、そうしていくと、現地の人々の心も和んでいきます。そういうことの繰り返しをしていって、みんなが交友できる場、これを大学でつくるといいかと思ひます。

全ていいことだと勘違いしてもいけない失敗が、香港の大会に出場した際、ボランティアといい交流が出来たと感じていましたが、その反面にボランティアの方が「ボランティアだるい」と私に言ってきたこともありました。理由を聞いたところ面倒な選手がいたということで、選手として残念でもあったことがありました。「交流するという事はいろんな考え方がある。」ということです。ここで迎え入れる立場の人たちが心閉ざさないで、いろんなことを感じる。またあいさつするなどして言葉、対応に心を入れる。そういうところを我々若い人から老人まで全員で心を開いてやって欲しいと思います。選手としてオリンピックに行って、やはり、無口だと一番辛いです。選手、スタッフにとって無口だと何を考えているのかと勘ぐってしまい、ミスな手段だと思います。まずは「話す」という手段をして交流という形になるかと思ひます。

「話す」中でも話題は必要ですし、興味の一部が一緒だと交流の距離が近づいていきます。そこで「スポーツ」は身振り手振りですぐ友達になれるかと思ひます。例えば仲悪い国とか、痛感したのはポーランドに滞在したときに感じたドイツとの関係です。過去に侵略されたポーランドと攻めたドイツという過去を引きず

っている感じがしました。しかしボートに限った話だったら、けっこう仲良くなります。お互いボート自体は大好きだと、ひとつのスポーツで交流が出来ることだと思います。こうしたスポーツの力を活かしていければと思います。

最後に首都圏に比べて愛媛県には人は多くありませんが、この愛媛大学などの学生たちを活かしながら、様々な交流を進めていくことが一番の希望です。私は年をとりながら、絶えず若者の発想に対して驚きます。そこで若い大学生たちには発想を持って、冒険（正課外活動）

やその他の仕事に取り組んでいくことが活かすことだと思います。その一つとしてスポーツも考えてみてはいかがでしょうか？我が校の卒業生として、ここにいる学生たちにエールを送りたいと思います。皆さんもぜひ、スポーツなどの交流があれば、あいさつから始まり、それを見て、実際に感じていければと思います。

以上です。長々と大変失礼しました。どうもありがとうございました。